

## 書評

## 最新・宇宙学 —研究者たちの夢と戦い—

栗野諭美・福江純 共編、定価 2100 円（裳華房）

「天文教育」の連載「天文学最前線」が一冊の本になった。といっても、何本か書き下ろしの原稿がいくつか含まれているのだが、「天文教育」の記事が元になっているという意味では、これまでになかった一冊と言える。

世の中には天文学の研究者、いわゆる天文学者と呼ばれる人が数多くいる。その数の分だけ、さまざまな研究テーマがあるとっていい。本書には、12 人の研究者が登場する。中には、なじみのない天文学者の名前もあるだろう。若手研究者からいわゆるその道の大家まで様々である。

天文学の研究というと、一般の人は、まずは国立天文台、そして東大や京大といった大学を思い浮かべるかもしれない。確かに、この本ではそういったところに所属する研究者も登場するが、登場する 12 人の所属が全部異なるのは興味深い点である。和歌山大学、香川大学、大分大学といったいわゆる地方大学から、さらに、防衛大学校の研究者も登場する。「防衛大学校に天文学者がいたのか？」と驚く人もいるかもしれない。日本の天文学研究が様々なところで行われていることがよくわかる。

もちろん、これだけ執筆者が幅広いということは、この本がいろいろ話題を含んでいることを表している。「太陽フレア」「太陽系外惑星探査」「地球外文明(ET)探し」「ブラックホール」「星震学」「重力レンズ現象とマッチョ」「銀河の化学進化」「宇宙誕生直後の様子」など。それだけに、最初から順番に読むのではなく、興味のある話題から読むといいだろう。そして、天文学者たちが、なぜこの研究テーマに興味を覚えたのか知ってほしい。彼らの目的は、さまざまである。「図鑑に銀河の

一生のページを作りたい」という人、「太陽フレアの理論を構築したい」という人、「重力レンズも望遠鏡だ」という人、「この宇宙の進化を理解したい」という人など、彼らの知的欲求は際限がない。まさにこの本のサブタイトルである「研究者たちの夢と戦い」が、この本につまっている。

私自身は、最近話題の超巨大ブラックホールに触れた「ブラックホールのミッシングリンク」、「星震学って、こういう分野だったのか」と思った「星の調べを聞く」、最近の X 線天文学の動向を知ることができた「まだまだあった X 線天体」を興味深く読ませていただいた。

わたしは、この本を宇宙や星に興味を持つ中高生にぜひとも読んでほしい。もちろん、中高生にとってはまだまだ難しい言葉やことばがあるだろう。しかし、天文学の研究者が、どのように研究をすすめているか、何をおもしろいと思っているか、といった情熱や知的欲求はきっと伝わると思う。天文学の研究を志す者にとっては、進路の参考にもなると思う。そのためにも、学校の先生や科学館公開天文台の職員にも読んでいただいて、中高生たちに勧めてほしい。

しかも、できるだけ早く読むこと。「最新」とうたっていても、新しい研究成果が次々出てくるからである。執筆者の一人、北本俊二氏(立教大学)は「3 年後に読み返すととんでもないことを書いているかもしれない」と書いている。

さて、12 もの話題が登場しているが、もれている話題がある。惑星や彗星といった太陽系科学、ASTRO-F による赤外線観測、南米チリに建設される電波望遠鏡 ALMA に関する突

っ込んだ話がなかったのは、私個人としては物足りない気がする。しかし、これらの話題は、ほかの本でも読めるだろうし、本書で初めて読める話題があるという意味でも、本書の意義は大きいかもしれない。

あえて苦言を呈すれば、女性研究者が1人も登場していないのが残念である。「ぜひ中高生に読んでほしい」と書いたが、もし女子の中高生がこの本を読んだら、「日本では女性の天文学者が活躍していないのでは」と思うかもしれない。実際、そうでないのは、皆さんもよくご存知であるが、気になったので付け加えておく。

矢治健太郎

(和歌山大学教育学部附属教育実践総合センター)

yaji@center.edu.wakayama-u.ac.jp